

7.6 細井平洲と古見のお夏

「八幡の語り草」第18話(13頁)

もう四十年も前の話だが、八幡第一国民学校現八幡小学校の中に併設されていた女子青年学校の畳敷の部屋の北側の壁に一枚の大きな写真の額が掛かっつたのを覚えとるかや。なんでも館先生(校医)の持っつらした軸の写真でなあ、忠女夏の絵だそうな。はだしの見すばらしいお婆さんの立姿を書いた絵で、それに細井平洲先生の賛がしてあつた。

あの写真は戦後いつの間にやら見えないようになつちやつたが、どこへ行つたのかなあ。誰か知らんかなあ。

こんな話を私は時折りするのだが、八幡小学校長だつた浜島辰丙さんも身を入れて探してくれたがとうとうわからずじまい。

夏は古見で享保十年(1725)に生まれた。成長して同村の富農只右衛門の家に奉公した。ところが只右衛門は青年になつたころから健康をそこねて床に就いたまま再び元のからだに戻れず、勿論、仕事も出来ない為次第に産を失なつていき、その日の暮らしにも困るようになった。下男や下女には暇を出した。ただお夏だけはなぜか「もう少し置いて下され。」と頼み、残つた僅かの田畑を耕やして主人とその母の食を満たしていた。それも永續させず益ます貧窮したので、母親はお夏を呼んで「お夏や、お前はよく私たちを助けておくれだが、もうとても家には先の見込みはない。お前はまだ三十前の身で、よそへ行けばいくらでも働ける。どうぞもうよそで働いておくれ。」といったが、お夏は首をたてに振らぬ。困つた母親は夏の兄を呼んで夏を取らそうとした。すると夏は主人と兄にこう言つた。

「わしが初めご奉公に上つた頃はお家は何の不自由のないご身分で、わしも安気に暮させてもらいました。今暮らしむきが悪うならしたのはお宅も不運、わしにも運のないことと存じます。運が悪くなつたご主人様や病気の旦那を見すてて今更どこへ行くあてがありません。そんなことをしたら罰が当たります。」ときっぱり断つた。

それからお夏は前にも増して働き、よそに日雇いに行つたり、仕事がないと乞食までしてわずかな錢を得て二人に食事をさせ、自分は着る物にも不自由し苦労してやつと三人が露命をつないだ。実に三十年一日のようであつた。

この事が遂に藩に聞え、藩主宗睦は手厚い褒美を与えてお夏の忠実を賞賛した。天明元年(1781)のことである。

藩士にして画家でもあつた内藤東甫は善行に感じ、夏の姿を画くこと数百枚、これを友人細井平洲に示した。平洲は絵を見て感涙を抑え、直ちに詩を賦し、また文章を作つて夏のまごころをもつて主人に仕える行いを賞賛し、これを絵の上部に書き記した。東甫はこの絵を有志に頒けて得た金をお夏に与えて生活を助けた。

以上は平洲が記した「題忠女夏像」に拠つてその大体を書いたのである。

平洲の詩は

人間百歳 浮沈あり

天上一輪 古今なし

楽道間居 偏へに月を待てば

清輝 幾夜か我が心を照らす

人生百年には浮き沈みがあるが、天上の月はいつも変りなく輝いている。私は道を楽し

んで月のようにりっぱな人を期待しているが、今お夏のまごころは月のように世の人びとを感歎せしめることだ。

と夏を月に比べて称賛した。

昭和十七年、古見の竜雲院住職平島泰山師ら有志の人々は協力して境内の一画を選び、墓域を設けて顕彰された。

ちょっと話が長うなったが、あの写真の額はほんとうに惜しいことをした。あれを作った西山茂校長さんも、きっとあの世で残念がっとならっせるぞなあ。